

文徵明と石湖－1530年代の作画活動と文人意識の成熟

都甲 さやか

16世紀呉派文人画壇の中心人物として知られる文徵明(1470－1559)は、90年に及ぶ生涯のほとんどを故郷の蘇州で過ごした。数ある蘇州の名勝の中でも、蘇州西南に位置し太湖の支湾をなす石湖を特に愛し、生涯を通して度々訪れ、少なからず石湖に因んだ詩書画を残している。本論は、文徵明の石湖をめぐる文芸活動に着目し、文徵明の画業に新たな一視点を加えることを目的とする。即ち文徵明が文人として成熟していく上で、石湖が果たした役割を明らかにし、16世紀呉派文人画壇の文芸活動を揺籃した地としての石湖の重要性を述べる。更に従来の研究で、文徵明が本格的な書画活動を開始する時期とされてきた1530年代が、文徵明の文人画家としての系譜意識が自覚され、画技と意識の両面において成熟をみせた時期であるという新しい見解を提示する。

本論は、次のような構成となる。第一章では、先学の見解をふまえつつ、文徵明の画作を年代順に整理し、1530年代の作を生涯の画業の中に位置付けた。更に文徵明が師と仰いだ沈周(1427－1509)の画作との関係に着目し、早期の文徵明が、沈周の教えのもと、文人画家としての画技と意識を身につけていく過程を具体的に考察し、1530年代に文徵明が文人画家としての歴史的位置を自覚するにあたって、沈周が大きな役割を担ったことを明らかにした。

第二章では、文徵明の石湖をめぐる文芸活動について、主に画作に焦点をあて、網羅的に考察を行った。石湖は春秋時代以来の古跡と、歴代の文人墨客が雅会を行った記憶を有する地であるが、そのことは文徵明が石湖と向き合う時、常に意識されていた。こうした石湖の場の記憶をふまえつつ、今日文徵明真筆と目される二点の石湖図、《石湖花游曲詩画卷》(詩卷：正徳9年【1514】、画卷：正徳15年【1520】、上海博物館蔵)及び《石湖清勝図巻》(嘉靖11年【1532】、上海博物館蔵)について比較検討を行った。12年の歳月を隔てる両作品は、同じ石湖を描きながらも、石湖をとらえる視点や表現を大きく異にしている。本章では、両作品の絵画表現と制作背景の考察を通して、その差異の意味を明らかにし、前者が元・至正8年(1348)の顧瑛(1310－69)、楊維禎(1296－1370)を始めとする玉山雅集のメンバーの石湖での雅会を念頭に制作され、それを鑑賞者に想起させるべく視点などが選択されているのに対し、後者にはそうした前提がなく、過去のあらゆる石湖にまつわる記憶を、鑑賞者に自由に想起させうる理想像として石湖を表しているという見解を提示した。

続く第三章では、第二章での石湖図をめぐる考察をふまえ、文徵明が制作にあたって、文人と名勝の関係性に意識を向けていたことを念頭に、分析を行った。特に《石湖花游曲詩画卷》における文徵明、彼の息子達である文彭(1498－1573)、文嘉(1499－1582)の三者の跋において、「文人の営為により、湖山がその気を増す」という考えが共有されている点に注目し、文人と名勝とが相互不可分の関係性にあるとする考えのもと、文徵明が、自ら石湖の品格を高め、その姿を後世に伝える文人としての意識に駆られ、石湖図をなしていたこと、一方、当時の鑑賞者である文人等の間でも、彼の文人の営為としての制作の意義が広く共有されていたことを指摘した。更に嘉靖45年(1566)の《石湖花游曲詩画卷》文彭跋で、東晋の王羲之(303－361)《蘭亭序》の「後の今を視るは、亦た猶ほ今の昔を視るがごとし」という一節が踏襲されている点に着目し、文徵明がかの《蘭亭序》の如く、時代を超えて石湖の勝を伝えうる普遍的な石湖図の制作に意識を向け、その思いを作品として結実させたのが《石湖清勝図巻》であったと結論付けた。文徵明にとって、普遍的な性格を持つ石湖の表象は、その実現自体が、石湖をめぐる文人としての自身の立ち位置を示すことで

もあった。

第四章では、《石湖清勝図巻》を含む、1530年代になされた代表作四点について考察した。北京任官(1523-26)後、帰郷して間もない1530年代は、文徵明が本格的な書画活動を開始する時期として知られ、しばしば当時の彼の心境の変化と結び付けて説明されてきたが、本章では、この時期の画作が、古画の図様を踏襲しつつも、それらを自身の作品の内に積極的に引用している点に着目し、新たな見解を提示した。即ちこの時期の画作は、自身の文人画家としての系譜、そして蘇州をめぐる文人としての自身の立ち位置への明確な意識のもと、過去の規範とすべき先達の画業を見出し、それらに肉迫するだけでなく、凌駕しようという自負心によって制作されていると結論付けた。

以上の考察から、文人・文徵明を育んだ場としての石湖の意義と重要性を明らかにし、文徵明の1530年代を、画技と意識の両面で文人画家としての成熟をみせた時期であると位置付けた。当時の制作の中で文徵明が見出し、画作に取り入れた文人画家の系譜は、後に明末の董其昌が「南北二宗論」において文人画家の系譜を提唱する上での資となった可能性が高い。本博士論文の考察から得られる上述の新知見は、中国絵画史上、文徵明の果たした功績に新たな一視点を加えると考え